

あいさつ

いよいよ「2025年問題」もあとわずかに迫ってまいりました。京都府北部地域においても地域医療の中核である医療職とりわけ看護職の育成が喫緊かつ焦眉の課題となっています。

昨年5月8日をもって新型コロナウイルス感染症の法的な位置づけが「5類感染症」となりました。その後、私たちはコロナ禍の数年間失っていた「日常」をまさに取り戻そうとしています。また、いわゆる「インバウンド」の方々も多く見られるようになり、活況を呈しています。皆さんの学び舎の窓からも爽やかな風とともに横一文字の「天橋立」の雄大な姿が垣間見えます。好天に恵まれ、多くの方々が天橋立の松並木を散策しておられることでしょう。

世界未曾有の危機的状況の中であっても、皆さんは崇高な志を常に抱き、看護職に就くことを切望し、看護学の基礎・応用的な学習にも果敢に取り組み、看護学の専門性を高めていること、とりわけ、京都府北部地域の地域包括ケアシステムの充実・発展に貢献したいと自己研さんに努めておられることを地域住民の一人としても大変うれしく思っています。

さて、「2025年問題」とは、いわゆる「団塊の世代」が後期高齢者の年齢に達することを契機とし、未曾有の「超高齢社会」到来によって生じる医療や福祉等をめぐる様々な問題点を総じて称するものです。また、「超高齢社会」に加え、政府などのさまざまな施策にも関わらず、「少子化」にも歯止めがかからない状況です。今後は、ますます生産年齢人口が減少し、働き手(マンパワー)が不足し、医療現場においても、人口減少地域でも医療機能の維持・確保が困難となることが危惧されています。

この世に生を受けた私たちが、限りある人生とはいえ、「生き甲斐」を見い出し、健康かつ安心して、「その人らしさ」を維持し、「尊厳」を持って一生を全うするためにも、その支援者である看護職の一層の役割が極めて大きいといえます。「地域包括ケアシステム」の「包括」とは英語では「インクルージョン」といいます。一人の患者様を医師、看護師などの医療職スタッフだけではなく、介護職や自治体の行政職、NGO他の様々な職種、地域住民、御家族の方々と手を携え(「協働」)、患者様を尊厳を持って「包み」込むこと、患者様を一人の人間として尊厳を持ってとらえる看護職の「人間愛」こそが、QOL(生活の質)の向上に貢献していることと思います。

行永分校はおもに小学生・中学生の学齢に該当する児童・生徒、とりわけ多くの医療的ケア児が修学し、それぞれの障害の特性に応じ、一人ひとりに応じた「学び」を深めています。医療機関との連携の下、療育センターの様々な職種のスタッフの方々との連携・協働により、児童生徒のQOL(生活の質)をさらに高めようとしています。わずかの時間ではありますが、本校での実習を通じて、皆さんの自らの成長の一助としていただければうれしく思います。

皆さんが念願の看護職への夢を果たし、生涯にわたって、探究心と向上心を常に持ち続け、更に御活躍されることを祈念し、あいさつとさせていただきます。

京都府立舞鶴支援学校
行永分校
副校長 堀江 嘉明